

開催地名	福井県福井市
開催日時	令和8年2月8日(日) 9:30 ~ 11:00
開催場所	福井県立図書館
語り部	武藏野 美和(岩手県陸前高田市)
参加者	防災組織役員・リーダー 福井市職員 60名
開催経緯	今回は、当市の自主防災組織連絡協議会の役員変更の総会に合わせて研修会を開くことができる良い機会だった。リーダーが多く集合できるこのタイミングで、リーダーだからできることについてお話が聞きたい。
内容	<p>ー地域を知っているリーダーだからこそできることー</p> <p>(1)はじめに</p> <p>普段雪がそれほど多くない陸前高田では、わずかな積雪でも車は時速30km程で慎重に走らせ、行動は制限される。このように生活の機敏さが阻まれる状態こそ災害である。災害とは特別な出来事ではなく、生活に根ざし、日常の動きを止めてしまうものである。三陸はリアス海岸が形成され、入り組んだ岩場が多く本来平地は少ない。しかし陸前高田は川によって平野部が開け、そこに町が形成された結果、津波の怖さを知らない住民が多く、壊滅的被害につながった。私自身、震災当時は津波の認識がなく、高台から黒い渦や流れてくる家屋を見ても現実としてすぐには理解できなかった。災害は目の前に来て初めてわかるものだ。私が話す東日本大震災の経験も全てが成功体験ではなく、地域を知る皆さん自身が判断し、地域を守ってほしいと思う。その過程で失敗することも重要な学びであり「もっとこうすれば助かったのではないか」という気づきを次に繋げてほしい。知識を持つだけでなく伝える責任もある、次の世代へ伝承することが大切である。是非、今日の学びを地域で共有してほしい。</p> <p>(2)東日本大震災での被害</p> <p>2011年3月11日14時46分、陸前高田は震度6弱、マグニチュード9.0の地震に見舞われた。揺れは約160秒続き、強弱の少ない横揺れで机や家具が振り回され、自分の体自体どこかに飛ばされるのではないかと思うほどだった。宮城県仙台市では震度7となり、キャスター付きの机はストッパーも効かず、会場はスケートリンクのような状態になったといわれている。</p> <p>当時人口約2万5000人弱の市で1757人が犠牲となり、202人は今も行方不明である。犠牲者のうち300~400人は指定避難所に避難していたと推定されるが、これは遺族への聞き取りから「そこにいたはず」とされた人数であり、遺</p>

骨が見つからず弔うこともできないのだ。これが津波の怖さなのだと思う。実際に山田町では、3年前に宮城県南三陸町で見つかった骨のかけらが鑑定を経て子どもの遺骨の一部と判明し、家族のもとへ返された。未だにこういったことがニュースになることがあるのが現実だ。

(3)津波てんでんこの考え方

まちの壊滅により商店で働く人や地域住民が亡くなり、多くの孤児・遺児が生まれた。学校管理下の子どもに犠牲はなかったが、迎えて帰宅した子は犠牲となった。岩手県で両親を失った子は94人、そのうち32人が陸前高田で、片親を亡くした子も約115人にのぼり、朝「行ってきます」と家を出て、二度と家族と会えなくなったのだ。もちろん帰る家もなくなってしまった。

公民館長や民生委員、市職員など誘導や救助に向かった公的立場の人の犠牲も多かった。リーダーは共に亡くなるのではなく、皆と一緒に助からなければならぬ。陸前高田では津波到達20分前までに避難完了とされている、まずは自分が助かる事、そして大切な人を助けるという「津波てんでんこ」の考え方である。震災当時のハザードマップでは市役所や消防署などがある海から2kmの市街地は、0.5~1mと想定されていたが、実際には15.6~15.8mに達し、壊滅したまちと化した。指定避難所の体育館も安全ではなく多くの犠牲者がでた。また、郵便局の職員が顧客財産を守ろうと輸送している際に亡くなるということがあった。

(4)災害は必ずやってくる

海岸まで5kmに位置するまちは海を見ることはできないが川を遡上してきた津波は11.3mに達し、沿岸部と同様の被害が生じた。津波は約10km先まで遡ったとされる。広い平野である仙台平野では約40kmも川を遡った。津波は水だけでなくがれきを含んでいることから、様々なものを壊しながら襲ってくる。津波は「凶器」である。海岸近くの雇用促進住宅では4階まで津波が到達したが、建物内での大きな犠牲は出なかった。駅前の米沢ビルでは、所有者が4階屋上から煙突付近へよじ登り一晩耐えて生還した人もいた。壊滅したまちといわれながらも自分の命を守り抜いた人が語り部として伝承活動をしている。これを他人ごとと思わないでほしい、災害は必ず来る。

(5)災害とはなにか

福井には九頭竜川がある、過去の教訓を生かす必要もあるが、必ずしも同じ状況とはなりえない。時間・季節・規模は毎回異なるため、いつでも安全が確保できるように備えておく必要がある。実際に1923年9月1日の関東地震、1995

年1月17日の兵庫県南部地震、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震と災害は繰り返し発生している。しかし地震や大雨という自然現象そのものが直接命を奪うのではなく、都市や生活の場があることで建物倒壊や火災などが起こり、災害となるのである。関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災のように「大震災」と呼ばれるのは、大きな被害を生活の場にもたらしたためであり、教訓として刻まれている。一方で身近な災害は数多く存在する。つまり災害とは、人の命や財産を奪ってしまうすべての事柄であり、それが住んでいる場所に影響が出るものである。

(6)多様性に配慮すること

大切なものを失った経験は誰にでもあり、それは人の命に限らず、ペットや思い出の品など人それぞれ。自分にとって大切なものが失われ、日常の笑顔が奪われること自体が災害である。この視点から、多様性への配慮が重要となる。避難所運営では男女別トイレの数だけでは解決せず、異性を介護する場合やオストメイト利用者など、個々の事情に応じた対応が必要である。必要な物資を自分で取捨選択できる環境、アレルギー対応食品を含め、皆が食べられるものを準備するという、柔軟な発想が大切である。こうした事前の配慮と環境づくりが「事前復興」であり、災害時に備える地域リーダーの基本的役割である。

(7)備えについて

持ち出し袋を考える防災講座は多いが、新聞紙スリッパの例のように特定の物に依存すると、新聞がない家庭は防災できないという誤解につながる。必要なのは目的に合った備えである。まず持ち出し袋は家庭の備蓄と別であり、一時避難のために1～2晩を過ごす想定で用意する。一方、水や食料など数日分の備えは生活の場で使う備蓄であり、二次避難・在宅生活のための準備である。これを分けて考えることが必要だ。持ち出し袋には、水や食料を詰め込む発想ではなく、普段のカバンに加えて薬や安心できる物など、自分にとって必要な物を入れる。明かりや雨具も、玄関に置きすぐ使える状態にしておくことが大切である。子どもがゲームや好きなおやつを入れたいとよく言うが、「大切な物」を考える過程そのものが家庭の防災につながる。通帳や印鑑よりも、普段から持つ物や心を落ち着かせる物も必要。本来の用途を理解して備えることが大切になる。

自主防災ではHUGやクロスロードなど多様な訓練を活用し、絵や優しい日本語で子どもや外国人にも伝わる工夫が重要である。子どもの視点を避難所運営に生かすことも求められる。実際の地震では津波避難により渋滞が発生し、迎えに行く行動は双方を危険にさらす可能性があるため、地域で事前に避難ルール

を決めておく必要がある。陸前高田では「シン・オートコール」といって自動音声で避難状況やSOSを把握し、必要な支援につなげる仕組みを整えている。先日の青森の地震の際、後発地震注意情報が発令されたが、避難の際に持ち出し袋を持参した人は少なかった。教訓を自分の生活に置き換えて備えることが大切になる。

(8)後悔を記憶し伝える

「これで最後だと分かっていたなら」という詩集は、9.11の同時多発テロで息子を亡くした母が残した思いから生まれたものであり、「もっと抱きしめたかった」「愛していると言いたかった」という後悔が語られている。この思いをもとに、岩手日報は「最後だと分かっていたなら何ができるか」という文章を発信し、3月11日は岩手県で思いを語り伝える日とされている。津波から逃げる知識は重要だが、日常で挨拶できなかつた、喧嘩したまま別れた、「ごめんね」を言えなかつたといった後悔も残る。よく記念碑に「手を離してごめんね」と自責の念を抱くメッセージがある、自分だけ助かつたことへの苦しみから心を閉ざす人もいる。私は高台に住んでいたため助かつたが、地域づくりに関わった仲間が多く亡くなつた。自分に何が出来た状況でないのに、悩み自責の思いを抱いたこともあつた。また、嫁だから位牌を持って逃げるべきといった地域の慣習や、「家族が逃げないから自分も逃げられない」といった状況が犠牲につながる場合もある。後悔で終わらせず語り合うことで次の一歩につながり、地域を知る一人ひとりが伝える役割を担う。

(9)思いをつなげる

パラコードはパラシュート降下用の丈夫なロープで、1本で約250kgの耐荷重があり、日常ではストラップとして携帯できる防災グッズである。タオルを掛ければ物干しや目隠しになるなど多用途に使えるため、講座では編み方を伝えキーホルダーなどを作つてきた。小学校1年生が、母親が作つたパラコードのキーホルダーをランドセルに付けたところ、先生に注意された。その小学生は防災の思いが込められた物だと校長に直談判し、特別に付けることが認められた。背景には、震災後にボランティアと七夕の山車を飾り、母が人に支えられて笑う姿を見て「自分も人を助ける人になりたい」という思いがあつたからだ。人のために行動することや笑顔が災害から立ち直る原動力になる。自分にとって大切な思いを言葉にして伝えることが、地域を少しずつ変える第一歩になる。

(10)さいごに

	<p>防災フェスタでは消防車の放水体験や制服試着などが行われ、私たちも同様の取り組みを実施している。その中で何ができるかを考えると、私たちは消防や復旧の専門家ではなく、防災に絶対の正解を示すプロもいないと感じる。それぞれの専門家はいるが、自分が地域でどう役割を果たすかを考えることが、防災につながる。</p> <p>「あの日が最後だったら」と思うように、明日は必ず来るが、迎えられるとは限らない。当たり前にある日常は実は貴重であり、「当たり前」の反対は「ありがとう」だといわれる。言葉で感謝を伝えることは大切である。天気や足元を気遣う声掛けや挨拶は安否確認にもなり、誰でもできる地域の防災活動である。声を掛け合うことで地域のつながりが生まれ、自分が地域の一員として存在する意味につながる。出会いに感謝し、この気づきを日常に生かすことが重要である。</p> 
開催地より	<p>福井の冬はとても寒く、この時期に災害が起きて避難所開設となると非常に厳しい生活になる。その暮らし方や方法を見直し、リーダーが何をすべきか考えてもらえたのではないかと思う。災害は一種類ではなく、住んでいる場所に影響が出ることで自然災害だけではないことを忘れないでほしい。</p>